

第2章 史跡河越館跡の自然的・社会的・歴史的環境

第1節 川越市の概況

川越市は、都心から30km圏内の埼玉県南西部地域に位置するベッドタウンでありながら、商品作物などを生産する近郊農業、交通の利便性を生かした流通業、伝統に培われた商工業、豊かな歴史と文化を資源とする観光業など、多様な業態が発達している。現在も埼玉県南西部地域の中心都市として発展を続けている。

大正11年(1922)には埼玉県内で初めて市制を施行し、昭和30年(1955)には隣接する9村を合併して現在の市域となり、平成15年(2003)には埼玉県内で初めて中核市に移行した。令和6年(2024)10月1日現在の人口は353,034人で、埼玉県内ではさいたま市、川口市に次ぐ第3位の人口を有する。

市内には、東武東上線、西武新宿線およびJR川越線の駅が多数存在している。鉄道の他にも、市西部を関越自動車道が南北に、首都圏中央連絡自動車道(圏央道)が市北部に接して通り、国道16号が東西に、国道254号が南北に抜けている。また、この間を、主要地方道をはじめとする幹線道路が中心市街地から放射線状に伸びる構造を取り、流通拠点としての良好な位置付けを示している(第2-1図)。

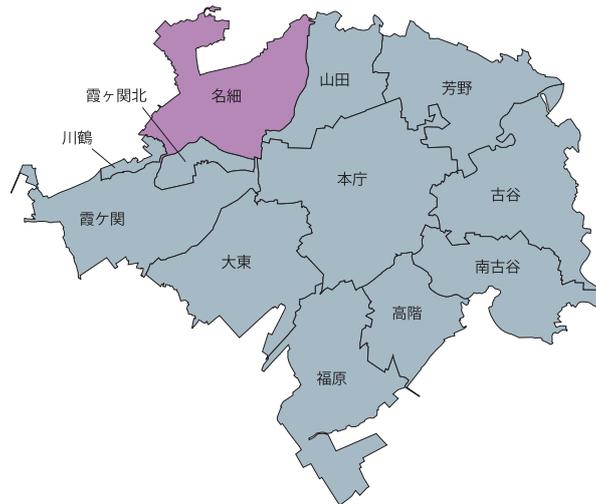


第2節 自然的環境

1. 地形

河越館跡は埼玉県川越市大字上戸 192 - 1 他に所在し、^{なぐわし}名細地区に属する（第2-2図）。埼玉県は関東平野西部に位置し、県西部は関東山地北部にあたる外秩父山地と奥秩父山地、上武山地、そして中央の秩父盆地からなる。県中央部では、武蔵野台地北端部から山麓部に沿って入間台地、岩殿丘陵、比企丘陵、北武蔵台地などが広がる。東部には、荒川低地と中川低地、^{めぬま}妻沼低地等に囲まれる大宮台地が分布する（第2-3図）。

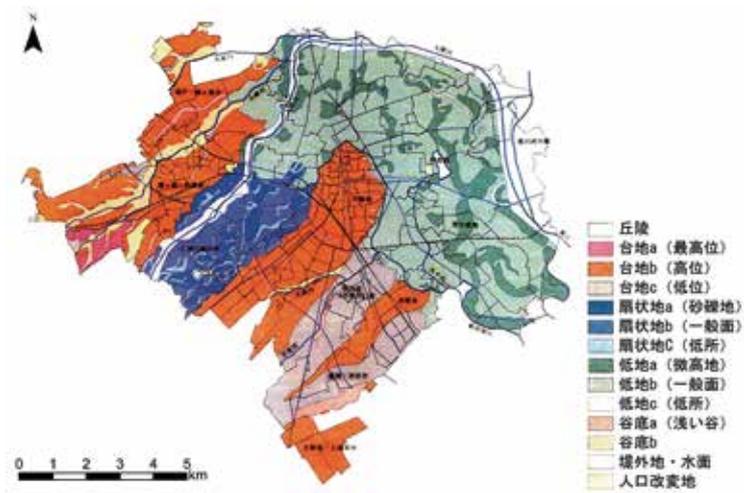
川越市域の北部から東部にかけては荒川低地が広がり、南部から中央部は広大な武蔵野台地の北端部となる。西部は入間川を東の境として入間台地となっており、河越館跡はこの入間台地の東端、入間川を東に臨む位置に立地している（第2-4・5図）。また、宮沢湖に端を発し、台地北側で^{おつべがわ}越辺川に合流する^{こあぜがわ}小畔川も入間台地には流れており、多くの河川が集まる環境に河越館跡は立地する。つまり、河越館跡は、広大で肥沃な荒川低地が広がる入間台地の東端に位置し、河川による水上交通へのアクセスが容易で、かつ水田耕作に適した沖積低地を擁する環境にあると言える。



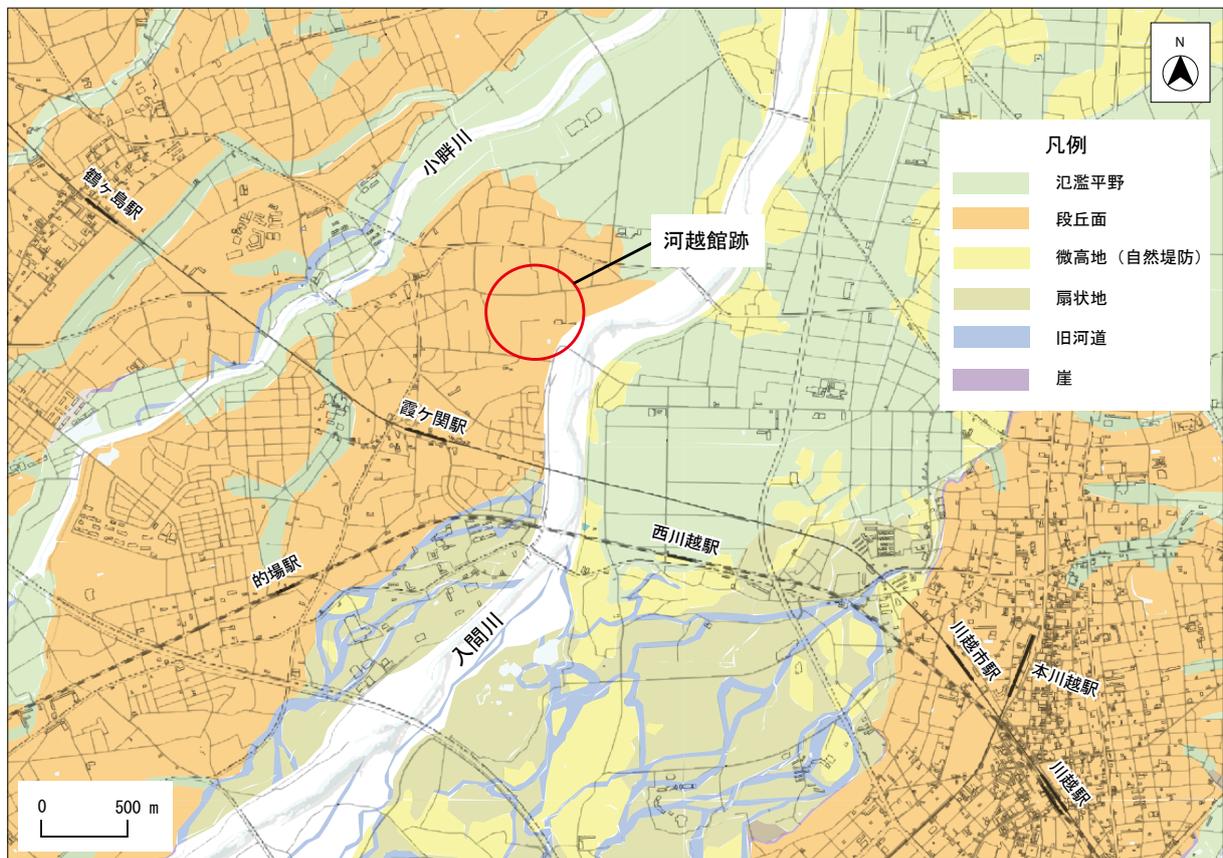
第2-2図 名細地区の位置



第2-3図 埼玉県の地形分類図



第 2-4 図 地形図



第 2-5 図 地形区分と河川、河越館跡の位置

II. 気候

川越市の気候は太平洋側気候に属し、夏は高温多湿で南からの季節風により蒸し暑く、冬は低温少雨で北からの季節風が強く、乾燥する。年間を通じて晴天の日が多く、穏やかな気候である。平成 29 年（2017）から令和 3 年（2021）までの過去 5 年間の平均値は、年間降水量が 1367.4mm、年間平均気温が 16.0℃、年平均湿度が 65% である（第 2-1 表）。ただし、令和 5 年はそれまでの平均を大幅に上回る平均気温と大幅に下回る平均降水量が記録された（第 2-2 表）。

乾燥した冬の季節風は、大火事をもたらす要因でもあり、江戸時代や明治時代の大火後に行われた町割りや葺造りの建築など、防火対策は川越城とその城下において特に重視された。

第 2-1 表 平成 29 年度から令和 3 年度までの気温等の平均値
（『第三次川越市地球温暖化対策実行計画（区域施策編）26 頁』）

	2017 年度（平成 29 年度）～ 2021 年度（令和 3 年度）の 5 年間の平均	全国平均（2017-21）※2
平均気温（℃）	16.0	16.0
平均湿度（%）	65.0	70.5
年間日照時間（時間）	2220.5（熊谷市）※1	2013.4
	2014.1（さいたま市）※1	
平均風速（m/秒）	2.1	-
降水量（mm）	1367.4	1758.9

※川越市のデータは令和 3（2021）年版統計かわごえ

※1 気象庁「過去の気象データ」の数値より算出

※2 全国 47 都道府県における平均値（2017 年（平成 29 年）～2021 年（令和 3 年））を平均
総務省統計局「第 72 回 日本統計年鑑 令和 5 年」からの数値により算出

第 2-2 表 平成 21 年度から令和 5 年にかけての川越の気象 (『令和 5 年度統計かわごえ』)

年次・月	気 温			平均湿度	風 速		降 水 量	
	平 均	最 高	最 低		平 均	最 大	降 水 量	1 日 最 大
平成21年	15.8	37.1	-3.5	62.8	2.1	25.3	1,320.0	110.0
22	16.1	38.7	-3.5	62.3	2.0	24.1	1,319.0	75.0
23	15.6	38.9	-5.6	59.0	2.1	26.4	1,263.5	131.0
24	15.3	38.1	-5.2	62.8	2.2	31.5	1,266.5	106.0
25	15.9	39.1	-4.9	68.4	2.3	32.7	1,299.5	113.0
26	15.5	39.1	-4.6	70.6	2.2	24.0	1,623.5	118.0
27	16.1	38.1	-3.2	73.9	2.1	23.0	1,337.0	152.0
28	15.9	37.2	-5.5	75.7	2.1	26.5	1,232.0	157.5
29	15.3	36.9	-5.4	68.0	2.2	24.9	1,336.0	134.0
30	16.4	39.8	-6.4	62.6	2.1	32.8	1,052.0	47.0
令和元年	16.1	38.2	-3.6	63.2	2.2	30.1	1,666.0	279.5
2	16.1	39.0	-4.0	66.4	2.1	24.9	1,380.5	91.0
3	16.0	37.5	-6.0	64.7	2.1	24.8	1,402.5	73.5
4	16.0	39.4	-5.7	65.1	2.1	21.4	1,173.0	131.0
5	17.2	39.2	-5.2	63.1	2.2	28.0	959.5	121.5
1月	4.6	14.0	-5.2	49.8	2.1	28.0	6.0	5.5
2	6.2	18.9	-3.5	49.2	2.6	19.0	32.0	15.0
3	12.2	23.4	1.7	61.9	2.0	23.8	91.0	24.0
4	15.9	29.0	4.7	54.5	2.7	19.0	48.0	23.0
5	19.1	34.6	9.2	63.9	2.4	19.1	116.0	23.5
6	23.4	34.8	14.3	73.6	2.0	14.6	249.0	121.5
7	29.1	39.2	21.5	66.9	2.2	15.1	12.0	4.5
8	29.7	37.8	23.3	72.9	2.5	14.8	105.5	27.0
9	26.9	36.4	16.2	75.6	2.0	14.0	153.0	69.5
10	18.2	28.7	9.2	64.3	1.9	15.7	91.0	33.0
11	13.0	26.4	2.9	65.5	1.8	17.9	49.5	38.5
12	7.9	20.0	-2.6	58.1	1.6	17.6	6.5	5.5

単位：気温 °C、平均湿度 %、風速 m/s、降水量 mm

資料：川越地区消防組合

Ⅲ. 植生

令和5年10～11月に河越館跡敷地内の樹木調査を実施した。区域内に生育する樹木は、30科50種である。内訳は在来種33種、外来種（ほとんどが植栽木）17種である。種数における外来種の占有度は34%である。

第2-3表、第2-6図は種別に積算胸高断面積をもとめ降順に示している。また第2-6図は樹木の位置関係を示している。

測定は胸高直径1cm以上の樹木について、樹木名及びcm単位で胸高直径を測定した。扁平断面は長径・短径を平均した。それらの値から樹木はすべて正円に見立て断面積を計算した。館跡の代表樹木は積算胸高断面積の大きい順にエノキ、ケヤキ、ウワミズザクラとなる。いずれも平均胸高直径は30cm前後で株数も多く、今後さらに肥大成長するものと考えられる。後継木も育っている。

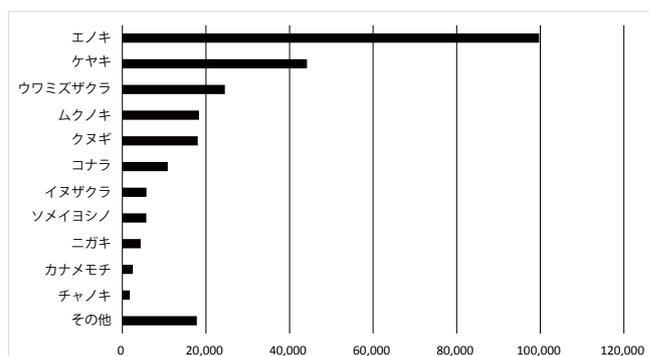
また、1株当たりの平均胸高断面積で比較すると大きい順にイヌザクラ、クヌギ、ヒノキとなる。とくにイヌザクラ、ヒノキでは、大径木があるのみで後継木は育っていない。

株数の比較ではチャノキ628株を筆頭に、ユキヤナギ、エノキ、ドウダンツツジと続く。植栽木として、積算胸高断面積を比較すると、大きい順にソメイヨシノ、カナメモチ、チャノキ、ヒノキ、マダワ、ドウダンツツジ、カキノキ、サザンカ、ハコネウツギとなる。トウネズミモチは、順位は低い環境省「生態系被害防止外来種リスト」のうち重点対策外来種に指定されている。

（執筆：牧野彰吾 川越市文化財保護審議会委員）

第2-3表 種別積算胸高断面積（降順）と株数の関係

順位	樹木名	積算胸高断面積 (cm ²)	株数	1株の平均胸高断面積 (cm ²)	平均胸高直径 (cm)
1	エノキ	99,711	121	824	32
2	ケヤキ	44,153	51	866	33
3	ウワミズザクラ	24,524	43	570	27
4	ムクノキ	18,331	31	591	27
5	クヌギ	18,029	10	1,803	48
6	コナラ	10,838	15	723	30
7	イヌザクラ	5,763	3	1,921	49
8	ソメイヨシノ	5,704	37	154	14
9	ニガキ	4,364	23	190	16
10	カナメモチ	2,515	94	27	6
11	チャノキ	1,764	628	3	2
	その他	17,806	970	3,494	276
	全樹木	253,502	2,026	11,166	560



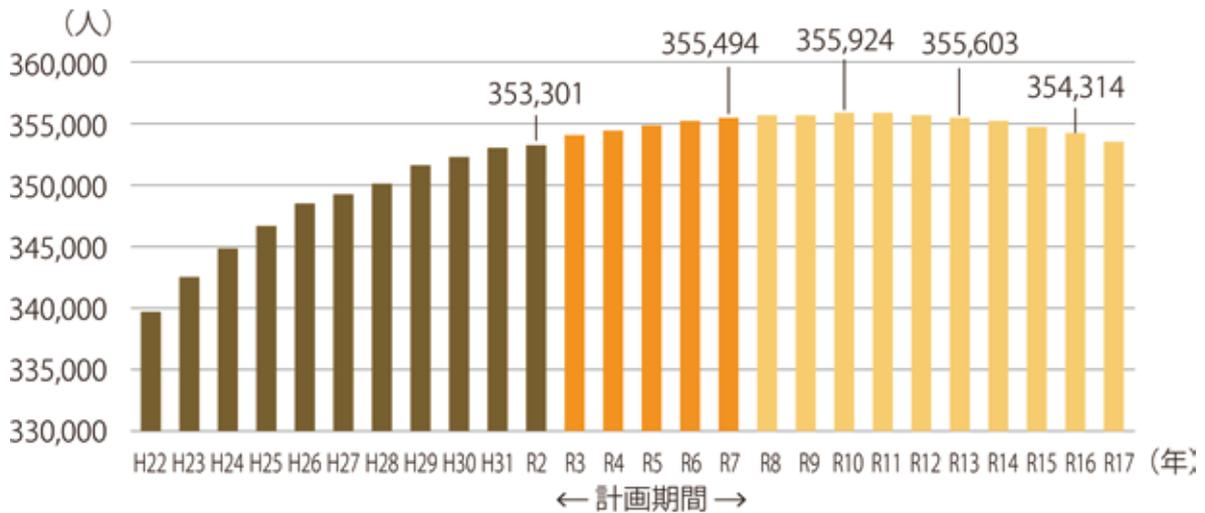
第3節 社会的環境

川越市の人口は、住民基本台帳における男女別人口、近年の人口動態及びコーホート要因法に基づく人口推計によると、人口の伸び率は落ち着きを見せながらも、微増で推移しているが、令和10年度を境に人口減少局面に転じるものと見込まれる（第2-7図）。年齢別構成は、生産年齢人口（15～64歳）が横ばい傾向で推移する一方、年少人口（0～14歳）が減少し、高齢者人口（65歳以上）が増加することが見込まれる（第2-8図）。河越館跡が所在する名細地区においても、人口の増減は市全体と同様に横ばい傾向にある。また、高度経済成長期以降、同地区では、大規模な住宅街が形成されている（第2-9図）。

本計画に対する上位計画である「第四次川越市総合計画」の取組のうち、年代や性別を問わず重要度が高いと市民が評価する施策として、「社会保障の適正運営」、「水道水の安定供給」、「消防・救急体制の充実」、「高齢者福祉の推進」、「防災体制の整備」などが挙げられている。市民生活に直接関わる福祉や社会保障、消防・救急の分野に対し、市の取組の充実を求める傾向にあると言える。一方、市の取組のうち、年代や性別を問わず重要度が低いと評価する施策として、「多文化共生と国際交流・協力の推進」、「広域的な連携の推進」、「時勢に応じた施策の推進」などが挙げられている。また、市の取組の結果に対し、年代や性別を問わず満足度が高いと評価する施策として、「水道水の安定供給」、「文化財の保存・活用」、「観光の振興」、「景観まちづくりの推進」などが挙げられている。市民生活との関わりが深い分野や、本市の貴重な財産である文化財の保護に対する取組に対し、高い評価となっている。一方、市の取組の結果に対し、年代や性別を問わず満足度が低いと評価する施策として、「道路交通体系の整備」、「交通ネットワークの充実」等が挙げられている。

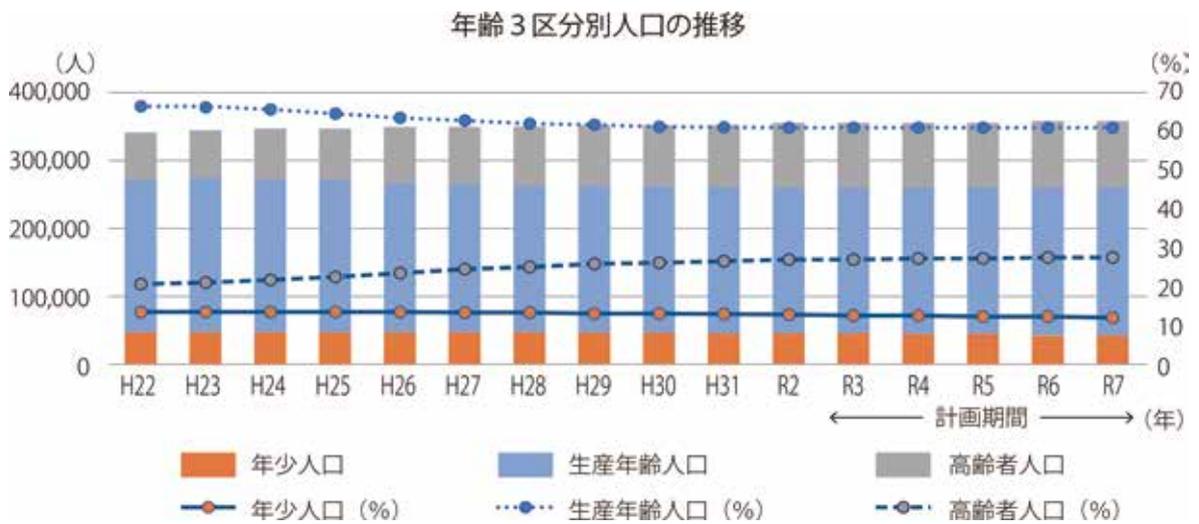
以上のように、河越館跡を含む市の文化財への取り組みに対する市民の注目度は高いことがうかがえるものの、地下に埋蔵され視覚的な理解が難しいということもあり、史跡に対する市民の関心は薄い傾向にあるため、改めて啓発が必要と思われる。

史跡公園として整備された河越館跡の一部は、都市公園法及び川越市都市公園条例によって都市公園に定められている。史跡として整備された範囲では、「川越市都市公園条例施行規則」によって禁煙、ごみの持ち帰り等、公園利用におけるルールを定めている。近隣の幼稚園・小学校の園児・児童とその保護者による利用やペットを散歩させる光景が史跡公園でたびたび見かけられることから、市民の憩いの場、コミュニティの場としての役割を担っていると言える。



出典：川越市住民基本台帳（各年 1 月 1 日）
令和 3 年以降は市推計

第 2-7 図 川越市の人口推移（『第四次川越市総合計画（後期計画）』10 頁）

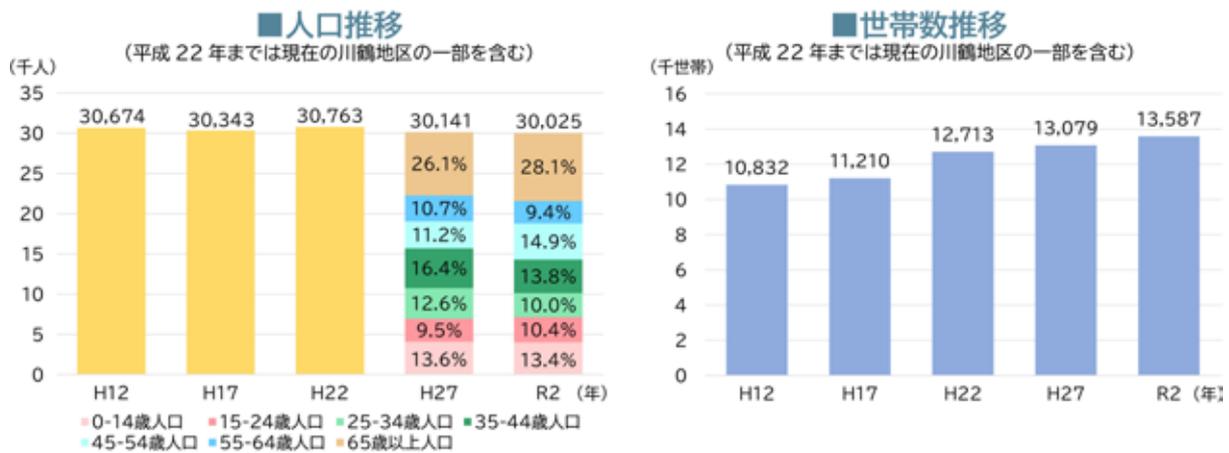


単位：人

	総人口	年少人口 (0～14歳)		生産年齢人口 (15～64歳)		高齢者人口			
		人口	構成比	人口	構成比	(65歳以上)		(うち75歳以上)	
						人口	構成比	人口	構成比
平成 28 年	350,223	45,324	12.9%	217,272	62.0%	87,627	25.0%	36,813	10.5%
平成 29 年	351,654	45,172	12.8%	216,566	61.6%	89,916	25.6%	39,279	11.2%
平成 30 年	352,433	44,801	12.7%	215,997	61.3%	91,635	26.0%	41,854	11.9%
平成 31 年	353,115	44,350	12.6%	215,732	61.1%	93,033	26.3%	44,414	12.6%
令和 2 年	353,301	43,700	12.4%	215,555	61.0%	94,046	26.6%	46,725	13.2%
令和 3 年	354,137	43,479	12.3%	215,556	60.9%	95,102	26.9%	47,919	13.5%
令和 7 年	355,494	41,423	11.7%	216,798	61.0%	97,273	27.4%	57,816	16.3%

出典：川越市住民基本台帳（各年 1 月 1 日）
令和 3 年以降は市推計

第 2-8 図 年齢 3 区分別人口の推移（『第四次川越市総合計画（後期計画）』11 頁）



※人口推移のH17以前は国勢調査から作成（各年10月1日現在） そのほかは住民基本台帳から作成（各年1月1日現在）

第2-9図 名細地区の人口・世帯数（『川越市都市マスタープラン』R6年165頁）

第4節 歴史的環境

河越館跡が立地する入間川左岸地域は、武蔵と呼ばれる地域のほぼ中央部に位置する。

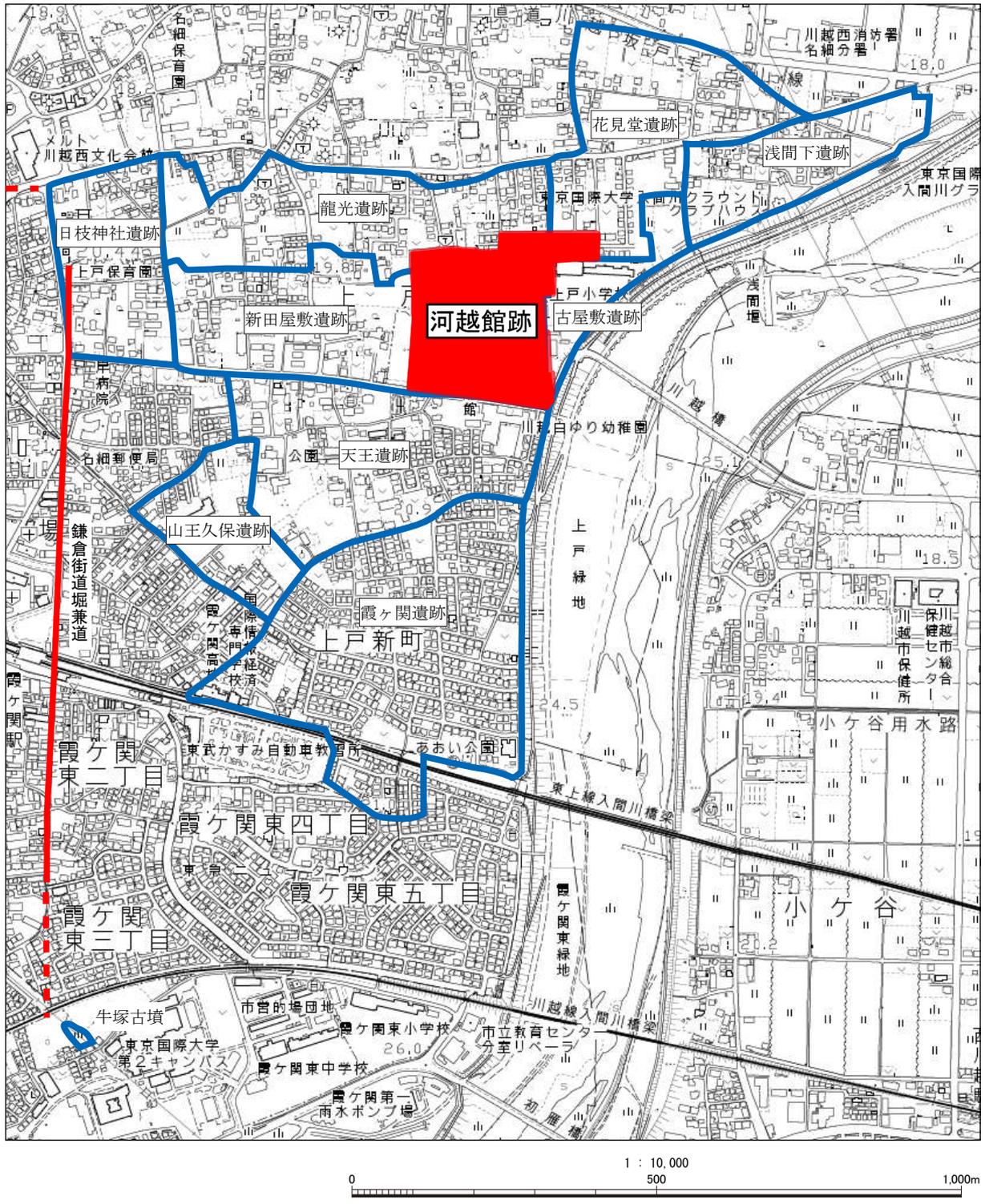
入間川左岸の低地に位置する浅間下遺跡^{せんげんした}では、弥生時代中期後半の方形周溝墓が発見されている。入間川左岸の台地上に位置する霞ヶ関遺跡^{かすみがせき}では、弥生時代後期の集落が調査され、南北の文化が交錯する様相が出土した土器から捉えられた。

古墳時代には武蔵各地で水系ごとに豪族が割拠するようになる。入間川水系の当地域には^{まとば}古墳群が分布し、それを構成する1つである古墳時代後期（6世紀後半）築造の牛塚古墳^{うしづか}は、7世紀に石室が改装され、全国的にも珍しい金銅製指輪^{こんどうせい}が出土している。

7世紀後半、飛鳥時代の川越周辺地域は武蔵国入間評^{むさしのくにのいるまひょう}として編成され、役所である入間評家^{ひょうけ}（後に郡家^{ぐんけ}）が入間川左岸の霞ヶ関遺跡とその隣接遺跡を中心に設置された（第2-10図）。また、この時期には列島各地に官道として駅路も整備され、武蔵国には上野国^{こうずけのくに}の東山道^{とうさんどう}から南に分岐した通称東山道武蔵路^{むさしみち}が縦貫し、駅路を利用する使者が馬を交換し休憩するほか、国内を巡行する国司の接待等が行われた施設である駅家^{えきや}が入間川渡河点の八幡前^{はちまんまえ}・若宮遺跡^{わかみや}にあったと推測されている。その根拠となったのが、同遺跡から出土した「驛長^{えきちょう}」と書かれた墨書土器である。

奈良時代になって入間郡と名称が変わった後も、霞ヶ関遺跡を中心に南は東下川原遺跡^{ひがししたがわら}、北は花見堂遺跡^{はなみどう}まで掘立柱建物を中心とした官衙関連遺構^{かんが}が分布するが、律令制が形骸化する平安時代以降はそれに関連する遺構は希薄となる。

平安時代末期、平氏の流れをくむ秩父氏が武蔵国内の河川流域に進出していく中、秩父氏一派^{むさしのくにのおおくら}が武蔵国大蔵（現在の埼玉県嵐山町）を経て河越へ拠点を移し、土地の名から河越を名字とした。河越氏は入間川左岸、現在の川越市上戸に館を築くが、その遺跡が現在の河越館跡である。河越館が築かれた12世紀後半以降、河越館跡に隣接する古屋敷遺跡^{ふるやしき}や新田屋敷遺跡^{しんでんやしき}等で、その時期の遺構・遺物が確認されていることから、史跡指定地外でも当時の人々が活発に活動していたと考えることができる（第2-10図）。特に古屋敷遺跡



第 2-10 図 河越館跡と周辺の遺跡 (G ゾーン)

では、川越で出土した手づくねかわらけの中でも最古となる 12 世紀後半のものが出土している。また、遺跡名である「古屋敷」は小字名に由来しており、地名としての「河越(川越)」が残されていない河越館跡周辺地域において、河越氏の屋敷が存在したことを示唆する地名として重要である。出土遺物や地名からは、当初の館中心部がこの地点にあった可能性が考えられている。

河越館の西側約 500 m には、河越氏が勧請した新日吉社と比定される上戸日枝神社を中心とした日枝神社遺跡が所在する。神社の参道は鎌倉街道上道の主要な支道の一つである堀兼道の一部でもあり、河越館は東隣を流れる入間川による水上交通路だけでなく、西側に主要な陸上交通路を擁していたことがわかる。なお、鎌倉街道堀兼道の入間川以南の路線については、大部分が古代以来の東山道武蔵路と重なることから、堀兼道は東山道武蔵路を踏襲する形で整備されたと考えられている(木本雅康 2018)。堀兼道については、古海道東遺跡で現道にほぼ重なる位置に路盤が検出されているほか、市内小堤にある市民の森第 1 号には掘割状の遺構が残されている。

河越館が役割を終える平一揆の乱(応安元年(1368))後は、館内の持仏堂から発展して寺院になったとされる時宗常楽寺が残った。14 世紀後半から 15 世紀代にかけて、河越館跡周辺の各遺跡からは、かわらけや、瀬戸窯、常滑窯等の製品が出土している。また、河越館跡の南側に立地する天王遺跡などでは、地下式坑や土坑が検出され、板碑・宝篋印塔といった供養塔が多数出土していることから、この一帯に供養の場が広がっていたと考えられる。

15 世紀末頃、河越館跡に山内上杉氏の^{やまのうちうえすぎ}上戸陣が築かれると、上戸陣に関わる遺構が天王遺跡・霞ヶ関遺跡など広範囲で確認されるようになる。さらに、それに伴うかのように、上戸陣段階の遺構からは山内上杉氏の関連遺跡で見られる特徴的なかわらけも出土している。上戸陣が終わる永正 2 年(1505)より後は、明確な遺構・遺物が少なく、土地利用の痕跡を追うことが困難となる。

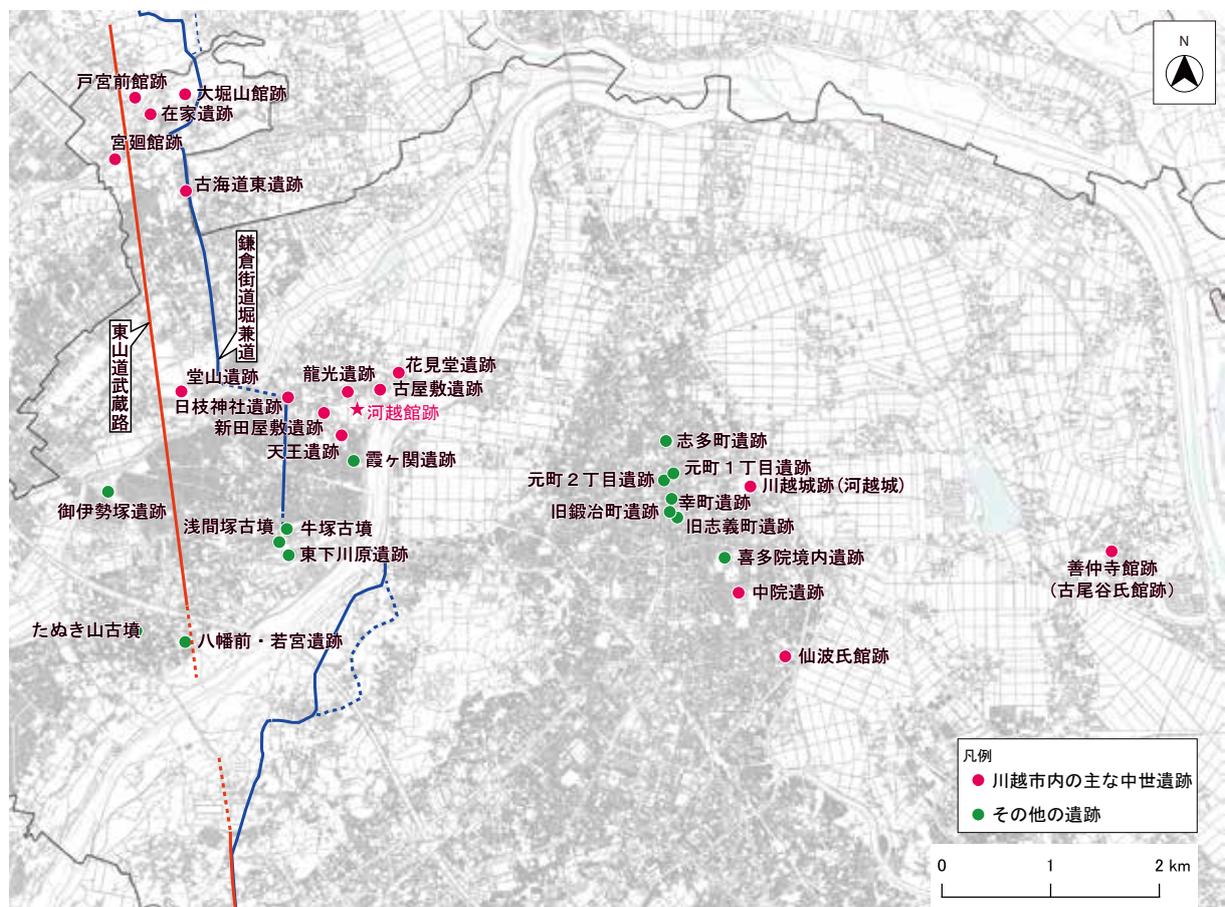
河越館跡が所在する上戸以外の地域の中世遺跡に目を向けると、市内中央の武蔵野台地先端部には長禄元年(1457)に扇谷上杉氏の^{おうぎがやつ}拠点として河越城(第 2-11 図 川越城跡)が築城される。15 世紀末に山内上杉氏が河越館跡に築いた上戸陣は、扇谷上杉氏との対立の中で河越城を攻めるためのものであった。また、市内北西部の下広谷には埼玉県指定史跡大堀山館跡があり、三重の堀・土塁に囲まれた「方形館」と 15 世紀後半の遺物が見つかっている。大堀山館跡の近辺でも同時期と考えられる城館跡が複数発見されており、大堀山館跡を含むこれらの遺跡は山内上杉氏と扇谷上杉氏の^{おうぎがやつ}争乱に関係するものではないかと考えられている。

天正 18 年(1590)に徳川家康が江戸城に入ると、戦国時代も終焉を迎える。河越には川越藩が置かれ、川越の中心は河越館跡の立地する入間台地東端部から戦国時代の河越城が立地する武蔵野台地北端部へと移る。寛永 16 年(1639)に川越藩主となった松平信綱^{のぶつな}は、中世以来の河越城の郭を拡張して近世城郭の川越城として整備した(以下、近世以降

は「川越」表記となる)。また、信綱は川越城城下町の整備を推進し、川越城跡とその城下町周辺には、多くの近世遺跡が確認されている。

近世の河越館跡周辺は、一部に旗本領と鯨井藩領（10年間のみ）があったが、大部分は川越藩領であり、あまめましんでん天沼新田・ひらつかしんでん平塚新田等の新田開発が行われた。江戸時代中期以降、河越館跡周辺地区は、古代以来属してきた入間郡から高麗郡の一部となった。江戸時代後期の文化・文政期（1804～1829）成立の地誌『しんべんむさしふどきこう新編武蔵風土記稿』のうち、高麗郡上戸村常楽寺の項には、常楽寺周辺に残る土塁が表現された挿図があり、だいどうじするがのかみ大道寺駿河守（大道寺まさしげ政繁）の砦跡と伝わっていることが記されている。

近代になると郡制が一旦廃止された後、明治11年（1878）に再び河越館跡周辺は高麗郡に所属することになった。その後、明治29年（1896）に埼玉県内の18郡が9郡に整理された際、入間郡に統合された。近世以来の鯨井村・上戸村を始めとした九か村が合併して名細村が成立し、旧村はそれぞれ大字と改められて区長が置かれた。村役場は、昭和30年（1955）に川越市と合併するまで、鯨井に置かれた。旧名細村には近世以来の水田・畑地が広がり、農業を主体とする生活が営まれた。河越館跡の大部分は現代まで畑地として使用されてきており、結果として住宅建設等の開発が及ばず、地下の遺構が保存されてきたと言える。



第2-11 図 川越市内の主な中世遺跡と河越館跡の位置